

蓑虫山人九州の旅

山根, 泰志
九州大学附属図書館eリソース課

<https://doi.org/10.15017/7234649>

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2023/2024, pp.27-36, 2024-09-18. Kyushu University Library

バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



蓑虫山人九州の旅

山根 泰志[†]

【抄 録】 前稿『『都府楼図巻』と蓑虫山人』では、九州大学附属図書館所蔵『都府楼図巻』の書写者である蓑虫山人の九州時代の旅程について、残された絵日記等により推定を試みた。本稿は、前稿以降に見出した若干の資料を紹介し、幕末期の蓑虫山人像を探る一助とするものである。

【キーワード】 蓑虫山人、城野静軒、木下鞆村、深水春山、西道仙、幕末九州、熊本、長崎

Minomushi Sanjin's Kyushu travelogue

YAMANE Yasushi

1. はじめに

放浪の絵師・蓑虫山人（蓑虫仙人、本名土岐源吾、号六十六庵主、1836～1900、以下蓑虫と略す）の生涯は、謎に包まれている。特に幕末の青年期はほとんどわかっておらず、前稿『[『都府楼図巻』と蓑虫山人](#)』¹（以下前稿）では、九州時代の旅程について、残された絵日記等により推定を試みたが、資料が断片的で旅の全体像の復元には程遠い。また、蓑虫の六十六庵設立の夢と勤王家としての活動の中で、九州大学附属図書館所蔵『[都府楼図巻](#)』がどのように位置づけられるのか、若干の展望を試みたが、それを裏付けるだけの蓑虫の具体的な活動を示す資料は乏しい。

前稿以降、「国立国会図書館デジタルコレクション」のリニューアルにより全文検索可能な資料が大幅に増加したこと、また、蓑虫が出会った人物の日記等を調査したことにより、蓑虫の九州時代の足跡を若干補足することができた。表1は前稿の表5「蓑虫山人九州時代年表」を補足・修正したものである（主に太字部分）。

表1 蓑虫山人九州時代年表

年	月日	事績	根拠資料
文久元年（1861）	10月28日	大村藩校五教館訪問	「御儒者御名録抄」（志田1937所収）
文久3年（1863）		怡土郡周遊（深江正覚寺訪問か）	宇佐『蓑虫山人絵日記』
	4月頃	八代訪問か	「木綿葉川図」（前稿附図7）「白木山妙見宮」（前稿附表 T-6-23）
	5月	人吉訪問	「青井阿蘇神社」（前稿附図9）
	6月27日	熊本木下鞆村宅訪問	『木下鞆村日記』（図3）
	8月	熊本訪問	「檜垣廻塔」（前稿附表 T-6-49・52）
	9月	玉名訪問	「肥後国玉名郡伊倉南北八幡宮」（前稿附図11）
	10月	熊本訪問	「肥後国飽田郡熊本八幡藤崎宮」（前稿附図12）

[†] やまね やすし 九州大学附属図書館 e リソース課
 (〒819-0395 福岡市西区元岡744) E-mail: yamane.yasushi.188@m.kyushu-u.ac.jp

1 山根2021。

文久4年（元治元、1864）	2月20日	大津坂本経治宅訪問	『寿賀廻舎日記』（大津町・荒木1993所収）
	3月8日	菊池赤星村訪問	「赤星邸新関柳川侯通行之図」（前稿附図13）
	3月9日	菊池城野静軒宅訪問	『城野静軒日録』（図11）
	3月23日	玉名郡中富会所滞在	『城野静軒日録』（図11）
	5～7月	宇佐地方周遊	宇佐『蓑虫山人絵日記』
元治2年（慶応元、1865）		長崎滞在か	「三月中旬於快園十八楽席上図」（前稿附図17） 「長崎外国人居留地」（前稿附図18）等

断片的なパーツが埋まったに過ぎず、相変わらず全体像は見えないが、本稿では、若き日の蓑虫の活動を伝えるこれらの資料を紹介することで、幕末期の蓑虫像を探る一助としたい。

2. 大村藩校五教館訪問

九州時代の最も早い蓑虫の活動を示す確実な資料が、「御儒者御名録抄」（志田1937所収）の下記の記述である。

西〔文久元年〕十月廿八日 濃列〔州〕安八郡結村 無言行者 土岐源吾

號蟲仙人

本資料は、原本の所蔵先は記載されておらず、志田1937では「五教館ヲ訪ヘル儒者志士ノ名ヲ記録セシモノ也」と説明される。冒頭に「山口清右衛門手記」とあり、山口清右衛門宅は大村藩校五教館に訪問する者の「文武修行宿」²になっていたため、本資料は宿帳のようなものと思われる。蓑虫の肩書が「無言行者」と記されており、晩年に至るまで何度も実行していた無言の行を幕末期から行っていたことがわかる。

五教館は、学頭の松林飯山（1839～1867、筑前国早良郡出身）を中心とする大村藩勤王派の拠点となっており、「御儒者御名録抄」に記載された人物も各藩の勤王家³が散見される。蓑虫も飯山と会うのが目的だったと思われるが、この時飯山は大坂にいて不在であった。

前稿では、不退寺旧蔵の長崎時代の絵日記に描かれた内容から蓑虫の長崎滞在時期を慶應元年（1865）頃と推定したが、文久元年（1861）段階で蓑虫が大村にいたということは、長崎には既に一度訪れていた可能性が高い。



図1 五教館御成門 筆者撮影

3. 熊本木下鞆村宅訪問

文久3年（1863）6月27日、蓑虫は熊本京町にある木下鞆村宅を訪問し、「勝地之図」を披露している（熊本県立図書館所蔵木下家文書『木下鞆村日記』、図3）。木下鞆村（諱は業広、通称は真太郎、別号は犀潭、1805～1867、菊池出身）は熊本藩を代表する儒者で数多くの門下生を育てた。後に紹介する『城野静軒日録』により蓑虫は鞆村から添書もらったことがわかるが、高い声望と広範な人脈を持つ鞆村の添書は蓑虫の活動の大きな助けになったことだろう。

また、前稿で、「阿蘇大明神祭典行列図」（前稿附



図2 木下鞆村塾跡（京町台公園）筆者撮影

2 岩崎彌太郎岩崎彌之助傳記編纂會編1967を参照。

3 久留米藩樋口和堂（九州大学附属図書館樋口文庫旧蔵者）、秋月藩海賀宮門、戸原卯橘、徳山藩本城素堂、杵築藩小串邦太、土佐浪士西春松、対馬藩亀谷省軒等。

図24、平成13年の西巖殿寺本堂火災により焼失したとされる）を、蓑虫が例年6月24・26日に開催される阿蘇御田植祭を実見して描いたと仮定して、文久3年6月24日頃に阿蘇にいたことを推定したが、『木下韓村日記』の存在により、その可能性はほぼなくなった⁴。蓑虫がいつ阿蘇を訪問したかは引き続き課題である。

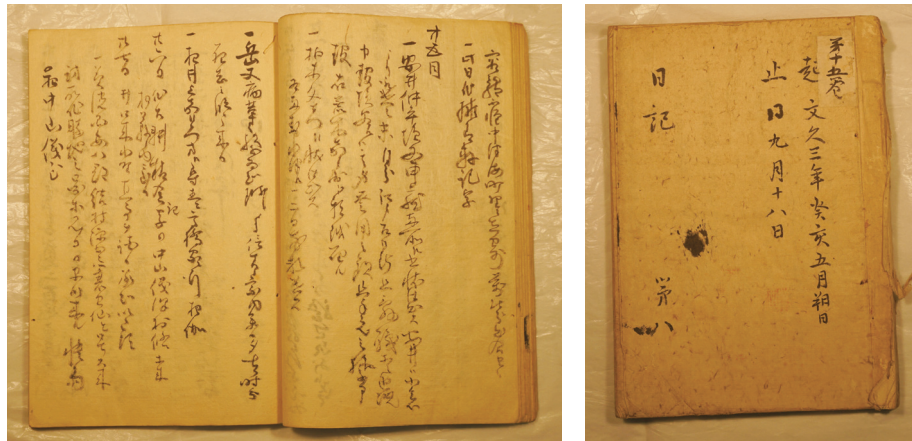


図3 『木下韓村日記』熊本県立図書館所蔵

4. 深水春山皆山楼訪問

文久3年中に熊本城下において、蓑虫は、藤崎八幡宮社司吉永賢木園（諱は秀和、後に千秋、1818～1904）、国学者小山聴雨（諱は川蔭、通称は多乎理、別号は栗園、1816～1896）、漢学者白木柏軒（諱は希魚、1804～1878）と会っていたことが不退寺旧蔵絵日記よりわかるが（前稿附表参照）、同絵日記の1枚である図4で蓑虫が会っている皆山楼主人が医師深水春山（諱は玄、字は士龍、通称は玄門、1776～1868）であると特定できたので、併せて紹介したい。

深水春山は葦北郡津奈木の医家深水宗安の子として生まれ、寛政4年（1792）に宗安宅に滞在した高山彦九郎（1747～1793）にその奇才を見出されている。名医として知られるようになり、やがて侍医に抜擢され、藩主や世子に従い、江戸に往復するたび、沿道には治療を乞う人々が集まり、宿駅ごとに市ができたという。辞職後、京陵の龍谷崖上に築いた小楼が皆山楼である。



図4 皆山楼図 ハートピア安八歴史民俗資料館所蔵

蓑虫に寄せた春山の漢詩には、「皆山」の関防印、「士龍」「深玄」の落款印が押印されている。

4 蓑虫筆『阿蘇山三十六坊絵図』（前稿附図22、阿蘇山西巖殿寺所蔵・熊本大学附属図書館寄託）が、阿蘇山学頭坊光徹の依頼により制作されたものと想定し、文久3～4年の光徹草稿『学頭日記録』（西巖殿寺所蔵・熊本大学附属図書館寄託）を阿蘇市教育委員会所蔵の写真により確認したが、蓑虫来訪記事は見当たらなかった。学頭坊の日記に蓑虫の来訪が記録されていない理由は、①筆者の見落とし②学頭坊日記の公的記録としての性格③学頭坊と蓑虫は会っておらず、蓑虫制作の絵図は明治以降に西巖殿寺に所蔵された等が考えられる。なお、太田1947・1949に、日本史家の栗田元次（1890～1955）が所蔵する蓑虫初期の絵日記断片10枚の内、「阿蘇大宮司宝物拝観図」なる絵日記が記載されていることから、蓑虫が阿蘇大宮司と会った可能性は高いが、池浦2014によれば、文久頃の阿蘇大宮司の日記は残っていないようである。

文久3年は米寿を迎えた春山を多くの各国の名士・文人が祝賀に訪れていた。蓑虫が春山を訪れたのは、描かれた樹木が紅葉しているので、秋頃と推定される。その遺髪を持ち歩いたといわれるほど高山彦九郎を崇敬していた蓑虫にとって、直に彦九郎の聲咳に接した春山と会えたことは、さぞかし感激だったに違いない。

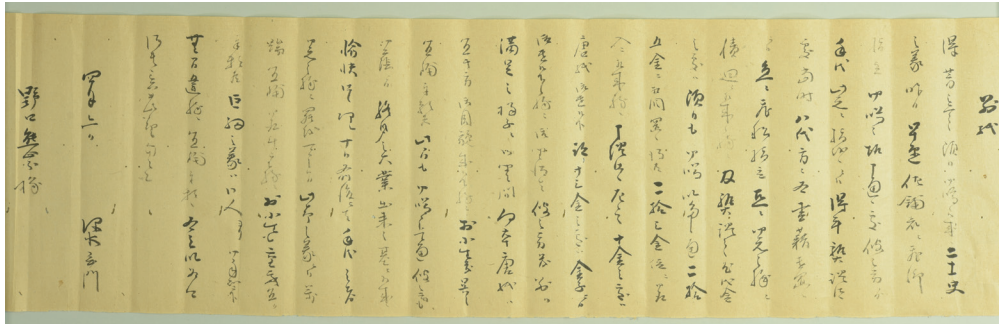


図5 野口熊四郎宛深水玄門書状 石本家文書 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵
津奈木時代の春山が二十一史（中国歴代正史）の入手を仲介していることを示す書状で、春山の多様な活動を示す。

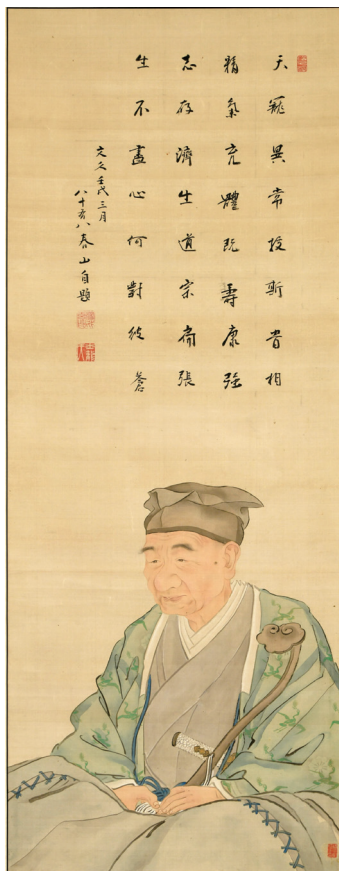


図6 椿椿山筆「深水春山像」 熊本博物館所蔵
治療のお礼に椿椿山（1801～1854）が描いた肖像画で、椿山没後の文久2年時に春山が賛を付している（竹原2022参照）。



図7 龍迫谷坂標識と京町一丁目公園 筆者撮影

公園の向こうに見える崖が皆山楼のあった龍谷崖で、龍迫谷坂という坂名が現在でも残っている。春山が蓑虫に寄せた漢詩には、「龍溪千丈涯〔崖〕」と形容されている。



図8 日吉神社古宮 筆者撮影

大津日吉神社は、火災で社殿が焼失したことにより、昭和3年（1928）に現在地に遷宮したが、蓑虫が訪れた頃は、現在の社地の北側の県道沿いにあった。

5. 大津地方周遊

文久4年（1864）2月20日、蓑虫は、大津日吉神社宮司坂本経治を訪問している。経治の日記『寿賀廻舎日記』（大津町・荒木1993）には下記のように記載されている（荒木源二訳）。

美濃国産の由、土岐源太夫伴源吾と申す者、諸国神社仏閣、名所古跡、古物珍物等を或は画し或いは登記、当国も過半打ち廻り、大矢野方に止宿仕り、大津内所々見物致し、其内真木村大神宮、中窪田村初生社、弓削法皇社景色等を画し、祭神勧請等の儀を書記し呉れ候様頼にて、あらまし記し遣し候。外に小原福神社焼石祭、奈我神社の旧跡神器等の事を記し遣し候。

蓑虫が滞在していた大矢野家は大津の素封家で、当主大矢野彦兵衛の弟格次（諱は種徳、号は宜春、1828～1882）は、筑前亀井陽洲（昭陽の次子）門下の古学派の儒者で、肥後では木下韓村に入門しているので、蓑虫は大津でも韓村の添書を活用したのかもしれない。

大津周辺では、北部の真木大神宮、中窪田村初生神社、熊本方面の弓削法皇社（現熊本市東区上弓削神社）の景観を描いたことがわかり、他にも多数の絵図を描いたはずだが、不退寺旧蔵絵日記には、現在安八町に所蔵されていないものも含めて、大津周辺の絵日記は、「熊本郭東駅路之図」（図9）くらいしか確認されていない。大津周辺の絵日記は、不退寺から流出したとされる絵日記に含まれている可能性が高い（前稿注27参照）。

なお、蓑虫が坂本経治を訪問した2月20日、長崎に向かう軍艦奉行並勝海舟の一行が、日吉神社近くの御茶屋及び大津手永会所で休憩をとり、同じ日に熊本に到着して、同行していた坂本龍馬が横井小楠のもとに派遣されている。明治以降に蓑虫は勝海舟と交流があったとされるも、確実な資料はなく、実際のところは不明だが、実は幕末の大津で海舟（及び坂本龍馬）とニアミスしていたことは蓑虫自身も知らなかっただろう。



図9 熊本郭東駅路之図 ハートピア安八歴史民俗資料館所蔵

加藤清正が熊本から大津まで植栽したといわれる大津街道杉並木が描かれており、海舟一行もこの大津街道を歩いて熊本に向かっている。

6. 菊池城野静軒宅訪問

元治元年（1864）3月9日、蓑虫は、菊池郡隈府の城野静軒宅を訪れている。書家として知られる城野静軒（諱は充通、通称は弥三次、1800～1873）は、27年分に及ぶ日録（熊本博物館城野家文書所蔵）を残しており、蓑虫の来訪もその中に記録されている（図11）。

蓑虫は、木下韓村、菊池郡赤星村の儒者高山蘭痴（諱は一貫、通称は謙太、1816～1883）、韓村の弟で菊池郡今村に開塾していた木下梅里（諱は真弘、通称は小太郎、1823～1897）の添書を携えて静軒宅を訪れ、静軒実弟で本草学者の右田喜十郎（1803～1877）宅及び静軒の書塾である水明楼で古器奇石を描いているが（図12・13）、特に注目すべきは、静軒に「肥後庵」の額字を書いてもらっていることである。蓑虫の生涯の夢である六十六庵は、国名ごとに展示室を分けた博物館で、庵ごとに各国一流の人に扁額の揮毫を依頼していたが⁵、「肥後庵」は静軒に依頼したということである。慶應3年（1867）に細川藩軍艦銘に静軒が揮毫した「龍驤丸」が藩より選ばれてから、静軒の書家としての名は決定的なものになり、細川家の子息などにも指導を行うようになるが、元治元年段階ではそこまでは至ってい



図10 城野静軒肖像 熊本博物館所蔵

5 中村1890参照。青森県立郷土館1984及び太田原2021に、廣澤安任揮毫の「陸奥庵」（長母寺所蔵）が紹介されている。

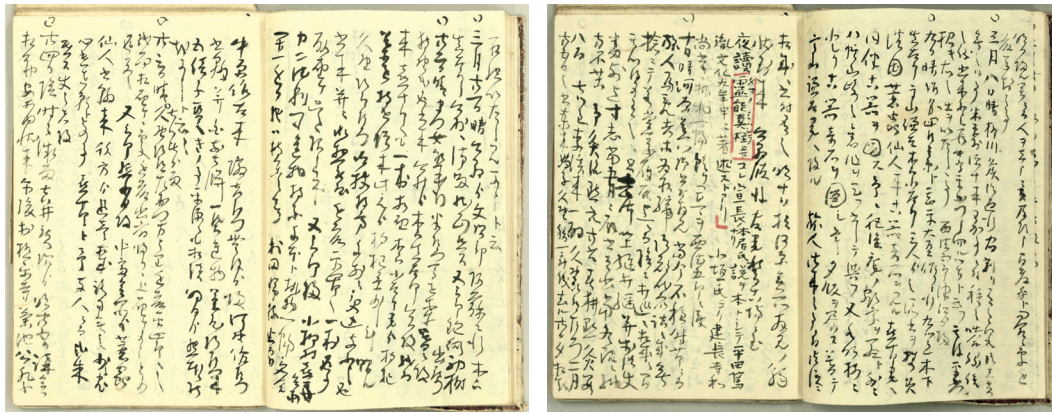


図 11 『城野静軒日録』 熊本博物館所蔵



図 12 右田喜十郎所蔵古器図 ハートピア安八歴史民俗資料館所蔵

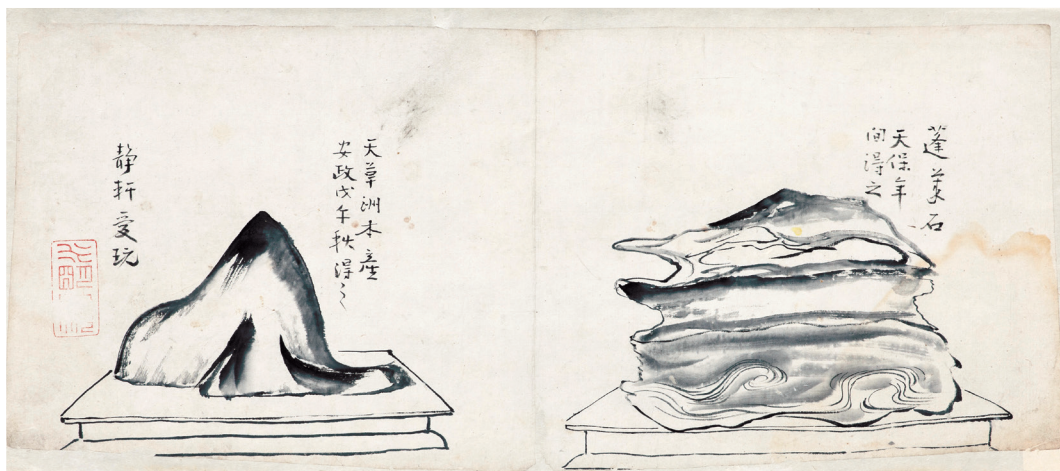


図 13 城野静軒所蔵奇石図 ハートピア安八歴史民俗資料館所蔵

なかった。蓑虫は、韓村ら静軒の実力を知る人たちからの推薦を得て、依頼するに至ったのであろう。肥後の旅の終わり頃に依頼している点をもて、「肥後庵」揮毫に最もふさわしい肥後随一の書家を見つけるために時間をかけていたことが窺え、蓑虫の六十六庵に対する情熱の高さを示すものである。

なお、蓑虫は静軒との夕食後に高山蘭痴宅に帰っていることから、菊池では赤星村の高山宅を拠点にしていたことが窺え⁶、3月23日には中富手永会所（現山鹿市鹿本町）からの蓑虫の無心を乞う書状が静軒に届いていることから、3月中～下旬は山鹿周辺を周遊していたのかもしれない。

6 そのため、前日の3月8日に柳川藩大名行列の絵図（前稿附図13）を描いたのは赤星村である。

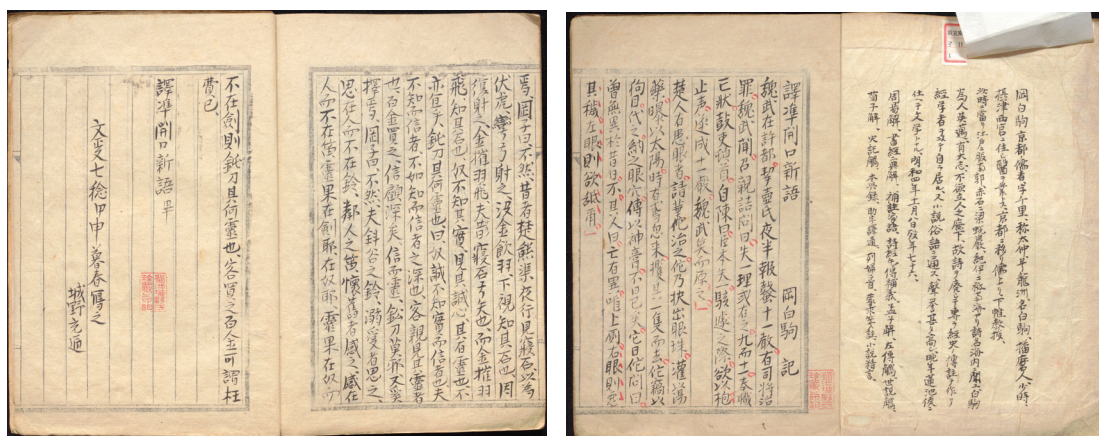


図14 城野静軒自写本『譯準開口新語』 文政7年(1824)写 濱文庫 九州大学附属図書館所蔵
城野静軒の蔵書は散逸したようで、「菊池城野氏珍藏之印記」の印を持つ書物は各機関で散見され、九大では他に九州大学第二分校旧蔵の『論語古訓』(町野鳳陽旧蔵)にも押印されている。

7. 西道仙と蓑虫山人

不退寺旧蔵絵日記の1枚である図15は、晩香主人邸において蓑虫と西楽山が歓談している様子を描いたもので、反故のように墨で楕円形に線が引かれている。前稿では人物の特定には至らなかったが⁷、蓑虫の隣に座っている西楽山が、長崎の発展に尽力した儒医・ジャーナリスト・政治家の西道仙(1836~1913)と考えられることが判明したので、ここに紹介したい。

道仙は天草郡御領村に生まれ、豊後、肥後で医学を学び、文久頃⁸に長崎に移住した。維新前後に九州鎮撫総督、長崎府知事の澤宣嘉に様々な建言をしたことと、自著『瓊浦品題』『草莽忠臣録』を献上したことにより、賞金を下賜されるが辞退し、代わりに官有地にある琴の形をした巨大な奇石(琴石)を所望した。琴石は重いうえに山の中にあって運べなかったが、道仙は以降陽琴石斎と号した。私塾瓊林学館の開業、新聞の発刊のほか、政治家・医師として上水道建設に尽力した。長崎文庫(明治27年開設)⁹の創立委員となり、県知事大森鐘一等と長崎古文書出版会を設立し、長崎関係資料の保存や出版に努めた。

道仙は西郷隆盛を敬愛し、西南戦争の際は『長崎自由新聞』を発刊して、その状況を報じた。道仙が西郷の心情を詠んで紙上に載せた漢詩は、長らく西郷辞世の詩「城山」として誤認されたことで著名となった。



図15 晩香邸の蓑虫山人と西楽山 ハートピア安八歴史民俗資料館所蔵

7 晩香主人を菊池の国学者江江晩香、西楽山は西寺の私塾楽山堂主であった医家城鞠洲と仮に推定していたが、いずれも誤りであった。

8 藤野1899では文久3年(1863)に長崎に移住したとするが、足立1889では、長崎出身の漢学者足立敬亭が幼少期に西道仙に従学したのは文久2年としている。

9 長崎文庫については、大庭・田村2003参照。

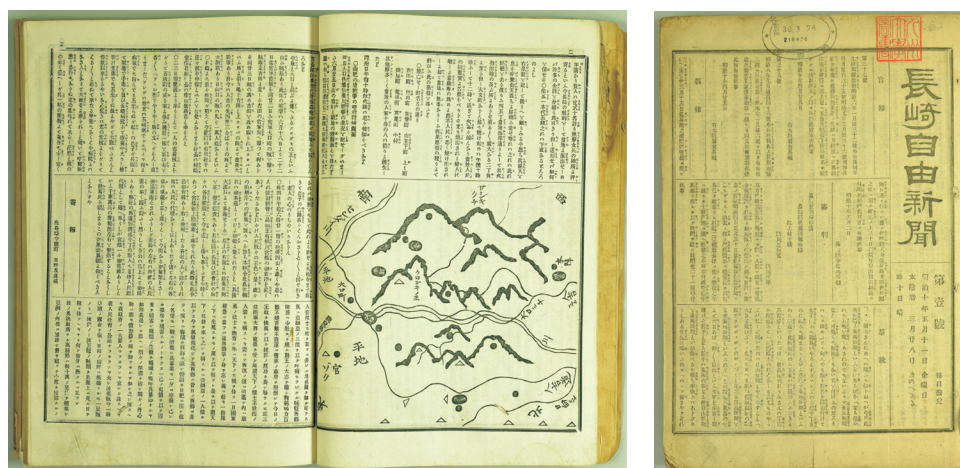


図16 『長崎自由新聞』第一号と第十号 松本文庫 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門所蔵
創刊号（明治10年5月11日）と10号（明治10年5月22日）掲載の八代球磨水俣地方略図。九州における初の日刊紙で、地理がわからない人のために戦地の略図も入れられ、「女子供にも読易いやうにする」ため、全面振り仮名付きという画期的なものだったが、西郷が自刃した後147号（明治10年10月31日）で休刊となった。

図15の西楽山＝西道仙というのは、道仙が幕末の頃に楽山と称していたこと（白木原萬壽墓碑銘）¹⁰が根拠だが、それだけではなく、道仙が明治13年（1880）に著した『長崎古今学芸書画博覧』（西1919）に、蓑虫のことを下記のように記載しているからである。

美濃人古物ヲ好ム過ル所ノ山水ヲ寫シ千巻ニ至ル 蓑蟲仙人

他に長崎の美術史に関する文献で蓑虫に触れているのは、管見の限り、西1919を踏襲した永見1927¹¹のみで、道仙が長崎では無名のはずの蓑虫をわざわざ記載したのは、直接会ったことがあると考えれば納得がいく。道仙にとって、蓑虫の存在はよほど印象に残ったのだろう。

もう一人の晩香主人については、同じく『長崎古今学芸書画博覧』の「現在書画諸家」に「彭城晩香」なる画家が記載されており、道仙と関係がありそうな晩香の雅号を持つ人物として注目される。唐通事の彭城家の一人と考えられるが、不退寺旧蔵絵日記「三月中旬於快園十八楽席上図」（前稿附图17）に、彭城昌宜（中平、通称は大次郎、後に太兵衛、唐姓は劉、諱は永壽、号は繡川、1832～1874）が見え、蓑虫が彭城昌宜と会っていることは確実だろう。彭城昌宜が晩香の雅号を持っていたことを示す文献は現在のところ見当たらないため、確実ではないが、晩香主人＝彭城晩香＝彭城昌宜を可能性として指摘しておきたい¹²。

8. さいごに

以上、本稿で紹介した資料は断片的なものに過ぎないが、熊本城下に入った早い段階で、肥後随一の儒者である木下韓村を訪れてその添書を入手し、その後の活動に役立てていること、綿密な準備の下、城野静軒に「肥後庵」揮毫を依頼していること等から、無名の蓑虫が、どのように各地の名士・文人の協力を得て六十六庵設立に向けて活動していたのかを窺うことができた。

蓑虫の旅の主な目的が、幕末期より六十六庵設立であったことを改めて確認させるが、そのことを象徴する落款印「六十六庵主人」（3.5×2.6cm）について、これまで『都府楼図巻』と宇佐『蓑虫山人絵日記』にしか確認されていなかった。最近ネットオークションに同じ落款印を用いた蓑虫の作品が出品され、現在は当館に所蔵されており、画像も公開している（図17）。落款印「六十六庵主人」が現在のところ明治以降の作品で確認されていないこと、人物描写が幕末期の作品の描写に近いことから、幕末から遠からぬ時期の作品と考えられる。青年期の蓑虫の数少ない作品の一つとして注目されるため、最後に紹介したい。

10 長島2004参照。

11 南宗文人画の項にその他大勢の扱いで蓑虫の名前が記載されるが、特にどういう絵師か記載はなく、西1919に見える蓑虫を名前のみ記載しただけだろう。蓑虫以外のその他大勢扱いされる絵師もすべて西1919で蓑虫とともに記載される絵師である。

12 明治維新後、西郷隆盛の命で彭城昌宜は商人に扮装して満洲を探查し、最後は台湾で客死した。唐通事の先輩で蓑虫とも親密（前稿注48参照）だった呉来安（1822～1896）が頌徳碑を書いている。増田1943参照。

タイトルを示すものは何もないが、床几に座った貴人（冠に纓と思しき長細い薄布が見える¹³）が橋の上から火振漁（鮎などの川魚を松明の火をかざして動きを止めて手づかみで獲る漁法）を観覧している絵図で、当館では仮題を「観漁図」としている。後年に蓑虫が同じ画題を描いた作品が2点存在している。里山企画菜の花舎2020掲載の土川氏所蔵作品¹⁴は、橋の上の貴人（頭には白い頭巾をかぶっている）が刀を差して床几に座り、供の者が二人になり、背景には富士山が描かれている。弘前市立博物館所蔵作品¹⁵は、橋の上の人物（頭には白い頭巾）が、一人で立って（刀や床几や供の者の描写はない）火振漁を見ており、背景には山（富士山には見えない）と月が描かれている¹⁶。微妙な違いがあるが、両作品とも火振漁観覧という共通の画題を、蓑虫が様々な構図で描いたということであり、九大所蔵作品は両作品より遡る原初的な作品ということになる。画題のベースになる故事や出来事があったのかどうかはわからないが、蓑虫がこの画題を若いころから気に入り、その後も繰り返し描き続けたということであり、各作品を比較することで蓑虫の作風の変遷を窺うことができる点でも興味深い作品といえるだろう。



図 17 蓑虫山人筆「観漁図」
九州大学附属図書館所蔵

〔附記〕今回の調査にあたっては、附属図書館の皆様をはじめ、下記の皆様に大変お世話になった。記して御礼申し上げる次第である。

阿蘇市教育委員会
太田原慶子氏（青森県立郷土館）
梶嶋政司氏（記録資料館）
熊本県立図書館
熊本博物館
西巖殿寺
ハートピア安八歴史民俗資料館

（以上五十音順）

参考文献

- 〔1〕 青森県立郷土館編（1984）『蓑虫山人』、青森県博物館等協議会
- 〔2〕 青森県立郷土館編（2008）『蓑虫山人と青森：放浪の画家が描いた明治の青森』
- 〔3〕 阿蘇町教育委員会編（2005）『阿蘇町史料目録』、阿蘇町
- 〔4〕 足立巻一（1982）『虹滅記』、朝日新聞社
- 〔5〕 足立清三（1889）『灯雨篇』
- 〔6〕 安藤直太朗（1967）『蓑虫仙人——明治奇人の一典型——』、風媒社
- 〔7〕 池浦秀隆編（2014）『近世阿蘇大宮司家・阿蘇宮関係史料目録』、熊本大学
- 〔8〕 岩崎彌太郎岩崎彌之助傳記編纂會編（1967）『岩崎彌太郎傳』
- 〔9〕 宇佐文化会館三和文庫運営協議会編（1988-1993）『蓑虫山人絵日記』
- 〔10〕 太田三郎（1947）「蓑虫山人（上）」『郷土文化』2（4）、pp.70-75、名古屋郷土文化会
- 〔11〕 太田三郎（1949）「土岐蓑虫伝」『郷土文化』4（2）、pp.13-21、名古屋郷土文化会

13 後年の二作品によるなら、纓ではなく、頭巾を略して描いたものかもしれない。

14 落款印は明治以降の作品にしか確認されない「蓑虫」印である。

15 奥脇2023に掲載。この作品の存在は太田原慶子氏にご教示いただいた。落款印は明治以降の作品にしか確認されない「奚疑」印である。

16 両作品とも橋の上の人物は蓑虫とされるが、そうだとすれば、土川氏所蔵作品は蓑虫が貴人に扮している戯画ということになる。

- [12] 太田原慶子 (2021)「蓑虫山人が夢みた博物館——資料「廣澤安任自筆草稿」を中心に——」『青森県立郷土館研究紀要』45、pp.75-80
- [13] 奥脇嵩大編 (2023)『美術館堆肥化計画2022』、青森県立美術館
- [14] 大津町史料編纂室編・荒木源二訳註 (1993)『寿賀廼舎日記抄』復刻・増補、大津町教育委員会
- [15] 大庭卓也・田村隆 (2003)「[「長崎文庫」創設始末\(上\)——長崎における図書館事始——](#)」『九大日文』3、pp.2-13、九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
- [16] 片岡浩毅 (2014)「[木下韓村伝関連史料の紹介](#)」『社学研論集』23、pp.272-278
- [17] 菊池市史編さん委員会編 (1986)『菊池市史』下巻、菊池市
- [18] 木野主計「木下韓村書屋門生名籍」(1980-1982)『神道学』107、108、110、111、113、114
- [19] 岐阜県博物館編 (1980)『蓑虫山人：旅と絵で綴った漂泊の生涯』
- [20] 木山貴満 (2021)「[城野静軒書「龍驤丸」について](#)」『熊本博物館館報』33
- [21] 清田之長 (1991)『柏軒白木先生』、玉東町
- [22] 月刊西美濃わが街社編 (1997)「特集：風狂の漂泊画人・蓑虫山人」『月刊西美濃わが街』244、pp.18-43
- [23] 里山企画菜の花舎 (2020)「[蓑虫山人とは？耶馬溪などを絵日記風に描いた放浪の幕末画人は、西郷隆盛を助けた？](#)」『ROCK 和楽 web』2020.11.11、<https://intojapanwaraku.com/rock/culture-rock/128326/> (2024.7.14確認)
- [24] 志田一夫編 (1937)『大村藩年譜』、福田開進舎
- [25] 島善高 (2014)「[木下韓村日記\(一\)](#)」『早稲田社会科学総合研究』13 (2)、pp.1-28
- [26] 高橋哲華 (1967)『かくれたる勤皇の志士：蓑虫山人』洋々社
- [27] 竹原明理 (2022)「[椿椿山筆《深水春山像》について](#)」『熊本博物館館報』34
- [28] 千々和実・萩原進共編 (1978)『高山彦九郎日記』4、西北出版
- [29] 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編 (2005)『勝海舟関係資料 海舟日記』1、東京都歴史文化財団、東京都江戸東京博物館
- [30] 長崎市小学校職員会編 (1925)『[明治維新以後の長崎](#)』
- [31] 長崎史談会編 (2020)『賜琴石齋西道仙：その生涯と事績』
- [32] 長島俊一 (2004)『西道仙：明治維新後の長崎を駆け抜けた快男子』、長崎文献社
- [33] 永見徳太郎 (1927)『[長崎の美術史](#)』、夏汀堂
- [34] 中村秋香 (1890)「蓑虫仙人の伝」『東洋学芸雑誌』7 (109)、pp.565-570
- [35] 名古屋市蓬左文庫編 (1981)『名古屋叢書三編』、名古屋市教育委員会
- [36] 西琴石 (1919)『[長崎古今学芸書画博覧](#)』、吉川弘文館
- [37] ハートピア安八歴史民俗資料館編 (2020)『放浪の文化人蓑虫山人展』
- [38] 福島桑雨 (1982)「城野静軒研究序説」『尚絅大学研究紀要』5、pp.53-66
- [39] 藤野彦次郎編 (1899)『帝国医家大史伝』天之巻、帝国史会
- [40] 古川増壽 (1919)『[大礼記念長崎県人物伝](#)』、長崎県教育会
- [41] 増田廉吉 (1943)『[鎖国の窓](#)』、朝日新聞社
- [42] 宮田安 (1979)『唐通事家系論攷』、長崎文献社
- [43] 武藤嚴男 (1928)『肥後先哲偉蹟後編』、肥後先哲偉蹟後篇刊行会
- [44] 望月昭秀著・田附勝写真 (2020)『蓑虫放浪』、国書刊行会
- [45] 山根泰志 (2021)「[『都府楼図巻』と蓑虫山人](#)」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2020/2021、pp.35-66
- [46] 横井吉助・山本等 (1980)『蓑虫山人絵日記：東海編』、「蓑虫山人絵日記」保存会
- [47] 吉田菊南著・大津史刊行会編 (1955)『大津史』、大津町公民館
- [48] 六車茂一郎 (1936)『熊本県葦北郡津奈木郷土誌』、熊本県葦北郡津奈木村



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ表示－非営利－改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>